［研究論文］

子育てに関するジェンダー意識
― 女性就業率高位の福井県を事例として ―

塚　本　利　幸

1．はじめに

塚本（2011）では、1）福井県は全国と比較して、「男は仕事、女は家庭」という考え方（以下、「性別役割分業意識」）に肯定的なものの割合が高いこと、2）高齢者で特にそうした傾向が強いこと、3）「性別役割分業意識」は男性の家事実施頻度に影響し、固定的な性別役割分担に否定的な男性ほど家事の実施頻度が高いこと、が確認された[1)]。

本稿では、「性別役割分業意識」の形成に大きく影響すると思われる子育てに関する親の考え方について、アンケート調査で得られたデータを用いて統計的に検討する。子どもが自分の所属する集団で一般的なものの見方、考え方、行動様式、選好、価値などを、他者との相互作用を通して習得する過程を第１次社会化と呼ぶ。そこで大きな役割を果たすのが、子どもにとって重要な他者であり、中でも両親や遊び仲間、先生等の影響が特に大きいと考えられている。ジェンダー意識の形成に関しては、家庭でのしつけや家事の分担のされ方などの影響が大きいと思われる。三世代同居や祖父母世帯との近居が多い福井県では、高齢者からの影響も少なくないと推測される[2)]。

2．アンケート調査の概要と分析の方法

福井県は、20歳以上の福井県民から無作為抽出した2000人を対象とする「男女共同参画に関する意識調査」を2010年７月に郵送法で実施した。有効回収数は1080件（回収率54.0％）であった。筆者は、福井県男女共同参画審議会の委員として、調査にアンケートの設計段階から関わった。回答者の基本属性は表１の通りである。

本稿では、「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく」という考え方への賛否（以下、「子どもに関する性別役割規範」）、「子どもに身に付けて欲しい資質」、「子どもの将来に期待すること」、「子どもに受けさせたい教育の程度」と、性別や年齢、などの基本的な属性との関係について統計的に分析する。

受付日　2011. 4 .28
受理日　2011. 6 .29
所　属　福井県立大学看護福祉学部

表１　回答者の基本属性

項　目	カテゴリー	%
性　別 （N＝1049）	女性 男性	54.7 45.3
年　齢 （N＝1048）	20～39歳 40～59歳 60歳以上	21.9 35.8 42.4
職　業 （N＝1010）	勤め人 自営業者 非常勤・パート・内職 家事専業 学生 無職 その他	45.0 20.3 8.2 4.8 0.8 18.4 2.5
配偶者の有無 （N＝1003）	あり なし	76.0 24.0
子どもの有無 （N＝1015）	あり なし	80.9 19.1
家計の支え手 （N＝919）	夫 夫と妻 妻 その他	28.6 55.9 10.7 4.8

３．子どもに関する性別役割規範

「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく」という考え方への賛否についてのまとめたものが表２である。

表２　子どもに関する性別役割規範

	賛　成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反　対	わからない
全体（N＝1074）	38.1%	41.8%	9.1%	3.6%	7.5%

同様の内容に関する最近の全国調査としては、国立社会保障人口問題研究所の「第４回全国家庭動向調査」があり[3)]、既婚の女性に関する集計結果が報告されている（表３）。比較対照のため福井県について、「わからない」を除いて、既婚の女性データだけを集計したものが表４である。実施の方法や時期が異なるため統計的な比較を行うことはできないが、「男は仕事、女は家庭」という考え方と同様、全国に比べて保守的な傾向がうかがえる。

表３　第４回全国家庭動向調査の集計結果

	まったく賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
全体（N＝5678）	24.1	49.4	20.5	6.0

表４　福井県男女共同参画アンケート調査の集計結果（既婚の女性のみ）

	賛　成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反　対
全体（N＝373）	33.2	51.5	11.3	4.0

男女別に集計したものが表５であり、女性に比べて男性で有意に賛成の割合が高い。年代別に集計したものが表６であり、高齢者で有意に賛成の割合が高くなっている。家計の支え手が「夫」の場合と、「夫と妻」の場合に分けて集計したものが表７であり、家計の支え手が誰であるかによって有意な差はみられない。

表５　子どもに関する性別役割規範（男女別）

	賛　成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反　対	わからない	有意確率（両側）
女性（N＝574）	30.9%	38.6%	11.4%	4.3%	9.4%	P<0.001
男性（N＝474）	46.3%	38.6%	6.8%	3.0%	5.3%	

表６　子どもに関する性別役割規範（年代別）

	賛　成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反　対	わからない	有意確率（両側）
20～39歳（N＝299）	28.4%	42.4%	13.1%	4.4%	11.8%	P<0.001
40～59歳（N＝369）	29.0%	45.8%	12.5%	4.9%	7.9%	
60歳以上（N＝435）	50.6%	37.5%	4.6%	2.3%	5.1%	

表７　子どもに関する性別役割規範（家計の支え手別）

	賛　成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反　対	わからない	有意確率（両側）
夫（N＝257）	43.2%	41.2%	6.6%	3.5%	5.4%	P=0.136
夫と妻（N＝504）	34.3%	46.0%	9.1%	3.0%	7.5%	

「子どもに関する性別役割規範」[4]と「性別役割分業意識」[5]、「日常的な家事の実施スコア」[6]、「週あたりの就労時間」[7]との関係を調べるために男女別にスピアマンの順位相関係数を求めたものが表８である。１％水準で有意な相関には濃く、５％水準で有意な相関には薄く、網掛けしてある。男女とも「男は仕事、女は家庭」という考え方に賛成のものほど、「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく」という考え方にも賛成する傾向がみられる。男性では日常的な家事の実施頻度の低いものほど、逆に、女性では実施頻度の高いものほど、「子どもに関する性別役割規範」に賛成する傾向が強い。「週あたりの就労時間」は、女性の「子どもに関する性別役割規範」とのみ有意な相関を示し、労働時間の長い女性ほど、そうした考え方に反対する傾向が強い。

表８　子どもに関する性別役割規範との相関関係

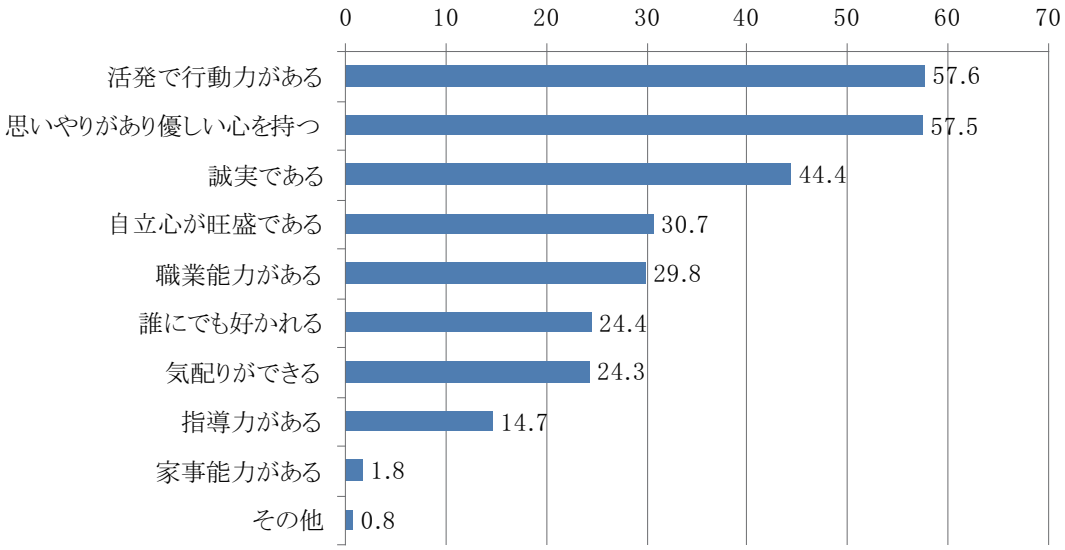
			性別役割分業意識	日常的な家事の実施スコア	週あたりの就労時間
子どもに関する性別役割規範	男性	相関係数	0.332	0.113	0.083
		有意確率(両側)	0.000	0.021	0.155
		N	429	417	295
	女性	相関係数	0.405	−0.146	0.186
		有意確率(両側)	0.000	0.001	0.000
		N	494	473	390

４．子どもに身につけて欲しい資質

男の子らしさ、女の子らしさの内容として具体的にどのようなイメージが抱かれているかを明らかにするため、子どもに身につけて欲しいと考えられている資質について検討する。アンケート調査では、男の子、女の子のそれぞれについて、「活発で行動力がある」、「思いやりがあり優しい心を持つ」、「誠実である」、「気配りができる」、「指導力がある」、「自立心が旺盛である」、「誰にでも好かれる」、「家事能力がある」、「職業能力がある」、「その他」の10項目から当てはまるものを３つまで選んでもらっている。

男の子について、選択したものの数が多い項目順に並べたものが図１である。５割以上が選択したのは「活発で行動力がある」、「思いやりがあり優しい心を持つ」の２項目、４割以上が選んだのが「誠実である」、３割近くが選んだのが「自立心が旺盛である」、「職業能力がある」の２項目である。

図１　男の子に身につけて欲しい資質



回答者の性別によって有意差がみられたのは、「職業能力がある」１項目だけで、男性では23.7％が選択したのに対して、女性では34.8％が選択した。男性よりも女性で、男の子に職業能力を身につけて欲しいと考える傾向が強い。

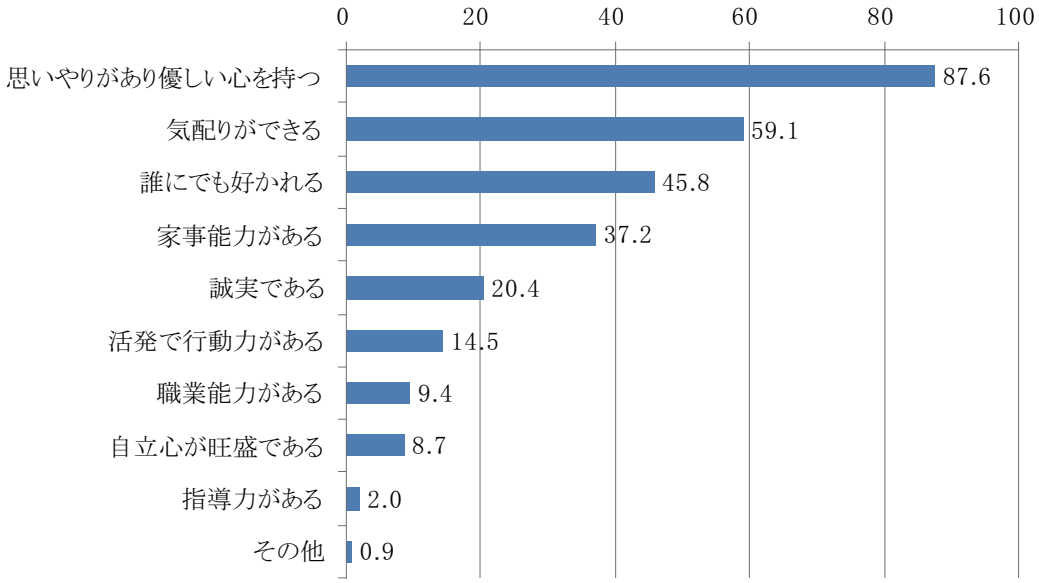
「誠実である」、「その他」以外のすべての項目で、年代による有意差がみられる。「活発で行動力がある」は、20～39歳の年齢層では67.4％が選択しているのに対して、40～59歳の年齢層では54.0％、60歳以上の年齢層では56.1％と、若い年代が支持した。「思いやりがあり優しい心を持つ」は、20～39歳で71.4％、40～59歳で62.3％、60歳以上で47.3％と年齢階層が下がるほど、支持するものの割合が高くなる。「誰にでも好かれる」が同様の傾向で、低い年齢階層から順に、30.4％、24.0％、21.4％のものが選択している。「気配りができる」は、20～39歳、60歳以上でそれぞれ28.1％、26.6％が選択したのに対して、40～59歳では19.8％しか選ばなかった。「自立心が旺盛である」と「職業能力がある」は、20～39歳でそれぞれ19.6％と21.9％、40～59歳で32.5％と35.0％、60歳以上で34.4％と29.7％と、低い年齢階層で支持するものの割合が低い。「指導力がある」は、20～39歳で8.5％、40～59歳で14.9％、60歳以上で18.5％と年齢階層が上がるに従って、選択するものの割合が増加する。

「男は仕事、女は家庭」という考え方に賛成するものの割合は、高齢層で顕著に高かった。そうした傾向を反映する形で、年齢が高くなるに従って、「仕事ができて、指導力があり、自立的な」男性像を支持する趨勢が強くなっている。年齢が低いものほど、「優しくて、誰からも好かれ、活発な」男性像を支持する傾向がみられる。

女の子に身につけて欲しい資質ついて、選択数の多い項目順に並べたものが図２である。

「思いやりがあり優しい心を持つ」を９割近くの回答者が選択しており突出している。「気配りができる」が６割近くでこれに次ぎ、以下、「誰にでも好かれる」、「家事能力がある」、「誠実である」の順に続く。

図２　女の子に身につけて欲しい資質

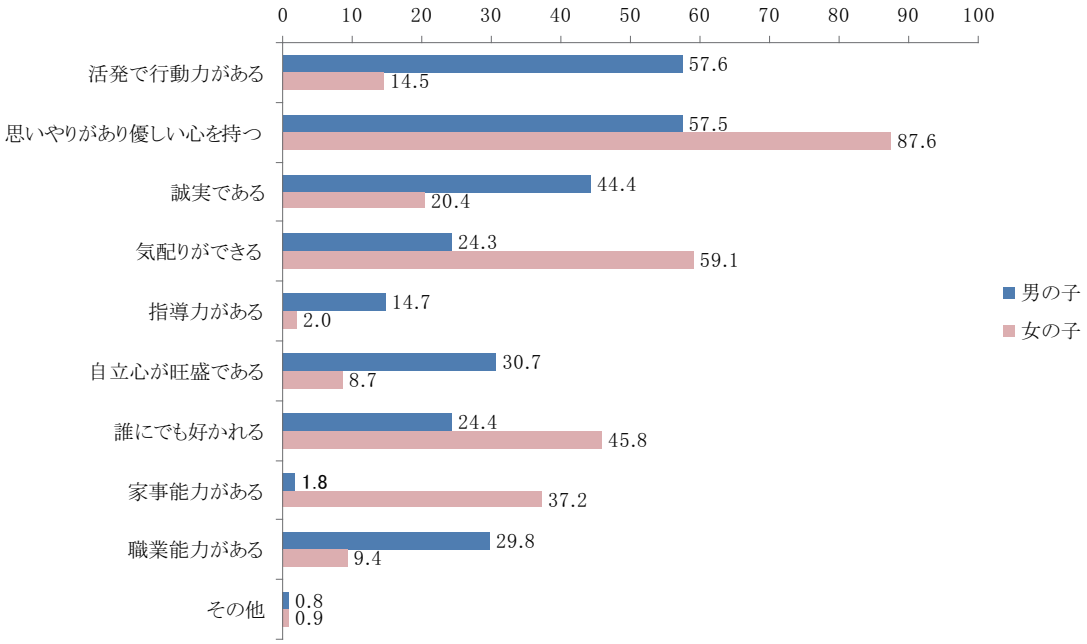


女の子に身につけて欲しい資質に関して、すべての項目で、回答者の性別による有意差はみられない。年代による有意差は、「活発で行動力がある」、「気配りができる」、「家事能力がある」の３項目に認められる。「活発で行動力がある」、「気配りができる」を選択した回答者は、20～39歳でそれぞれ26.8％と65.9％、40～59歳で16.0％と60.7％、60歳以上で7.2％と54.3％となっており、年齢階層が低いほど支持するものの割合が高い。「家事能力がある」では、逆に、20～39歳で26.4％、40～59歳で35.1％、60歳以上で44.2％となり、年齢階層が高いほど支持するものの割合が高い。

上位５項目で、男の子、女の子に共通するのは「思いやりを持ち優しい心を持つ」、「誠実である」の２項目に限られ、選択したものの割合には２割以上の差がある。子どもに求められる望ましさのイメージは、子どもの性別によって大きく異なっている。項目ごとの選択者の割合に関して、男の子の場合、性別や年代によってかなりのばらつきがみられる。これに対して、女の子の場合、それほど大きな違いはない。女の子に求められる望ましさの方が、男の子に比べてより固定的であることが推察される。

男の子、女の子を比較したものが図３である。「その他」以外のすべての項目に１％水準で有意な差がみられる。

図３　子どもに身につけて欲しい資質（男の子、女の子）



「活発で行動力がある」、「誠実である」、「指導力がある」、「自立心が旺盛である」、「職業の能力がある」の５項目は、男の子に身につけて欲しい資質として選択したものの割合の方が高く、「思いやりがあり優しい心を持つ」、「気配りができる」、「誰にでも好かれる」、「家事能力がある」の４項目は、女の子の身につけて欲しい資質として選択したものの割合の方が高い。

「子どもに関する性別役割規範」と「子どもに身につけて欲しい資質」の10項目をクロス集計した結果、５％水準以下で有意な差があるのは、男の子の資質では「活発で行動力がある」（P＝0.023）、「家事能力がある」（P＜0.001）の２項目であり、「男の子は男の子らしく」という考え方に賛成のものほど「活発で行動力がある」を選び、反対のものほど「家事能力がある」を選ぶ傾向があった。女の子の資質では、「活発で行動力がある」（P＜0.001）、「思いやりがあり優しい心を持つ」（P＜0.001）、「自立心が旺盛である」（P＜0.001）、「家事能力がある」（P＜0.001）、「職業能力がある」（P＝0.001）の５項目で有意差がある。「女の子は女の子らしく」という考え方に賛成のものほど「思いやりがあり優しい心を持つ」、「家事能力がある」を選び、反対のものほど「活発で行動力がある」、「自立心が旺盛である」、「職業能力がある」を選ぶ傾向があった。

親が抱いている「男の子らしさ、女の子らしさ」のイメージが、子どもに期待する家事能力に影響するためか、子どもの性別役割規範に肯定的なものほど女の子に、否定的なものほど男の子に家事能力を望む傾向がある。

5．子どもの将来に期待すること

アンケート調査では、男の子、女の子のそれぞれについて、将来どのように生きて欲しいかに関して、「社会的な信用や信頼を得る」、「家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす」、「経済的に恵まれた生活をする」、「本人の趣味を生かした生活をする」、「その他」の５項目から当てはまるものを１つ選んでもらっている。

子どもの性別ごとに集計したものが表９である。女の子の場合は79.5％と８割近くの回答者が「家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす」を選んでおり、圧倒的に支持されている。男の子の場合は最も多く選ばれたのが「社会的な信用や信頼を得る」の45.3％で、それに「家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす」の37.0％が続く。１％水準で有意な差が認められる。

表９　男の子、女の子に将来どのように生きて欲しいか

	社会的な信用や信頼を得る	家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす	経済的に恵まれた生活をする	本人の趣味を生かした生活をする	その他	有意確率（両側）
女の子（N＝1015）	5.2	79.5	9.4	5.0	0.9	P<0.001
男の子（N＝1034）	45.3	37.0	13.0	3.8	1.0	

表10　女の子に将来どのように生きて欲しいか（男女別）

	社会的な信用や信頼を得る	家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす	経済的に恵まれた生活をする	本人の趣味を生かした生活をする	その他	有意確率（両側）
女性（N＝538）	5.0	79.6	10.6	4.1	0.7	P=0.504
男性（N＝457）	5.3	80.3	7.9	5.5	1.1	

表11　男の子に将来どのように生きて欲しいか（男女別）

	社会的な信用や信頼を得る	家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす	経済的に恵まれた生活をする	本人の趣味を生かした生活をする	その他	有意確率（両側）
女性（N＝553）	48.5	36.0	11.4	3.1	1.1	P=0.132
男性（N＝460）	41.5	38.0	15.0	4.6	0.9	

女の子、男の子に将来どのように生きて欲しいかにつて、回答者の性別ごとに集計したものが表10、表11である。女の子の場合は「家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす」が圧倒的に支持され、男の子の場合は、「社会的な信用や信頼を得る」と「家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす」が人気を分け合う結果となっている。いずれも有意な差は認められない。

表12　女の子に将来どのように生きて欲しいか（年代別）

	社会的な信用や信頼を得る	家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす	経済的に恵まれた生活をする	本人の趣味を生かした生活をする	その他	有意確率（両側）
20～39歳（N＝220）	4.5	81.4	7.7	5.5	0.9	P=0.327
40～59歳（N＝358）	4.2	78.5	12.6	3.9	0.8	
60歳以上（N＝416）	6.2	80.3	7.5	5.3	0.7	

表13　男の子に将来どのように生きて欲しいか（年代別）

	社会的な信用や信頼を得る	家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす	経済的に恵まれた生活をする	本人の趣味を生かした生活をする	その他	有意確率（両側）
20～39歳（N＝224）	32.1	53.6	7.1	5.8	1.3	P<0.001
40～59歳（N＝364）	40.9	38.5	15.1	4.4	1.1	
60歳以上（N＝424）	56.4	26.7	14.4	2.1	0.5	

女の子、男の子に将来どのように生きて欲しいかにつて、回答者の年代ごとに集計したものが表12、表13である。女の子の場合は、どの年代でも「家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす」が圧倒的に支持され、有意な差は認められない。男の子の場合は、「社会的な信用や信頼を得る」と「家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす」に回答が集中するが、年代があがるにつれて「社会的な信用や信頼を得る」を選ぶものの比率が32.1％、40.9％、56.4％と増加し、逆に、年代が下がるにつれて「家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす」を選ぶものの比率が26.7％、38.5％、53.6％と増加する。１％水準で有意な差が認められる。

５．子どもに受けさせたい教育の程度

アンケート調査では、男の子、女の子のそれぞれについて、受けさせたい教育の程度について、「高等学校まで」、「短期大学・高等専門学校まで」、「専修学校・各種学校まで」、「大学以上」、「わからない」の５項目から当てはまるものを１つ選んでもらっている。

子どもの性別ごとに集計したものが表14である。女の子、男の子ともに「大学以上」という回答が最も多いが、男の子の場合65.1％と過半数を大きく超えるのに対して、女の子の場合は38.8％と４割にとどかない。男の子の場合「高等学校まで」、「短期大学・高等専門学校まで」、「専修学校・各種学校まで」という回答が１割前後なのに対して、女の子の場合「高等学校まで」が14.8％、「短期大学・高等専門学校まで」が25.3％、「専修学校・各種学校まで」が14.2％と「大学まで」以外の選択肢にも回答が分散している。１％水準で有意な差が認められる。

表14　男の子、女の子に受けさせたい教育の程度

	高等学校まで	短期大学･高等専門学校まで	専修学校･各種学校まで	大学以上	わからない	有意確率（両側）
女の子（N＝1015）	14.8	25.3	14.2	38.8	6.8	P<0.001
男の子（N＝1039）	9.2	9.0	10.8	65.1	6.0	

女の子、男の子に受けさせたい教育の程度について、回答者の性別ごとに集計したものが表15、表16である。女の子に受けさせたい教育の程度に関しては、男女とも「大学以上」が４割程度、「短期大学・高等専門学校まで」が25％程度と大差がなく、回答者の性別によって有意な差は認められない。男の子に受けさせたい教育に関しては、男女とも「大学以上」が65％程度と一番多いが、男性ではそれに「高等学校まで」の12.0％が続くのに対して、女性では「専修学校・各種学校まで」の12.1％が続き、５％水準で有意な差がある。

表15　女の子に受けさせたい教育の程度（男女別）

	高等学校まで	短期大学･高等専門学校まで	専修学校･各種学校まで	大学以上	わからない	有意確率（両側）
女性（N＝543）	14.2	25.6	15.1	37.6	7.6	P=0.616
男性（N＝459）	15.3	23.7	13.5	41.4	6.1	

表16　男の子に受けさせたい教育の程度（男女別）

	高等学校まで	短期大学･高等専門学校まで	専修学校･各種学校まで	大学以上	わからない	有意確率（両側）
女性（N＝556）	6.7	9.4	12.1	65.3	6.7	P=0.017
男性（N＝459）	12.0	8.3	8.5	66.0	6.7	

表17　女の子に受けさせたい教育の程度（年代別）

	高等学校まで	短期大学･高等専門学校まで	専修学校･各種学校まで	大学以上	わからない	有意確率（両側）
20～39歳（N＝222）	15.8	16.2	9.5	46.4	12.2	P<0.001
40～59歳（N＝357）	10.1	21.0	14.8	46.8	7.3	
60歳以上（N＝422）	17.8	32.5	16.6	29.6	3.6	

表18　男の子に受けさせたい教育の程度（年代別）

	高等学校まで	短期大学･高等専門学校まで	専修学校･各種学校まで	大学以上	わからない	有意確率（両側）
20～39歳（N＝224）	12.1	4.5	7.1	64.3	12.1	P<0.001
40～59歳（N＝363）	6.9	5.2	10.7	71.3	5.8	
60歳以上（N＝427）	9.1	14.5	11.9	61.6	2.8	

女の子、男の子に受けさせたい教育の程度について、回答者の年代ごとに集計したものが表17、表18である。女の子に受けさせたい教育の程度に関しては、20～39歳と40～59歳の年代で「大学以上」という回答が一番多く、それに「短期大学・高等専門学校まで」が続き、それぞれ46.4％、46.8％と16.2％、21.0％なっている。これに対して60歳以上では、「短期大学・高等専門学校まで」が一番多く32.5％で、これに「大学以上」の29.6％が続く。回答者の年代によって１％水準で有意な差が認められる。男の子に受けさせたい教育に関しては、どの年代でも「大学以上」が最も多く、年代の若い順に64.3％、71.3％、61.6％となっている。２番目に回答が多かった項目は、年代ごとに異なり、20～39歳では「高等学校まで」と「わからない」がいずれも12.1％、40～59歳では「専修学校・各種学校まで」が10.7％、60歳以上では「短期大学・高等専門学校まで」が14.5％となっている。１％水準で有意な差が認められる。

表19　女の子に受けさせたい教育の程度×子どもに関する性別役割規範

	高等学校まで	短期大学・高等専門学校まで	専修学校・各種学校まで	大学以上	わからない	有意確率（両側）
賛成（N＝385）	19.2	28.8	16.9	30.4	4.7	P<0.001
どちらかといえば賛成（N＝427）	11.9	26.5	13.8	42.6	5.2	
どちらかといえば反対（N＝93）	14.0	12.9	16.1	50.5	6.5	
反対（N＝37）	0.0	16.2	8.1	62.2	13.5	

表20　男の子に受けさせたい教育の程度×子どもに関する性別役割規範

	高等学校まで	短期大学・高等専門学校まで	専修学校・各種学校まで	大学以上	わからない	有意確率（両側）
賛成（N＝394）	10.4	10.4	12.7	62.2	4.3	P=0.039
どちらかといえば賛成（N＝428）	8.4	9.1	9.1	69.6	3.7	
どちらかといえば反対（N＝94）	8.5	5.3	17.0	60.6	8.5	
反対（N＝38）	5.3	7.9	5.3	68.4	13.2	

女の子、男の子に受けさせたい教育の程度と「男の子は男らしく、女の子は女の子らしく」という考え方への賛否の関係をまとめたものが表19、表20である。女の子に受けさせたい教育の場合、「子どもに関する性別役割規範」に反対する程度が強くなるほど、「大学以上」という回答の割合が増加し、順に30.4％、42.6％、50.5％、62.2％となっている。女の子らしさに肯定的なものほど大学未満の学歴でよしとするものが多く、１％水準で有意な差が認められる。男の子に受けさせたい教育の程度に関しても、「子どもに関する性別役割規範」への賛否によって回答にばらつきがあり５％水準で有意な差があるが、女の子の場合とは異なり、ハッキリとした傾向は読みとれない。

６．まとめ

福井県は全国と比較して、「男は仕事、女は家庭」という考え方に肯定的なものの割合が高かったが、「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく」という考え方に関しても同様の傾向がみられる可能性が高い。男女別では、男性でそうした考え方に賛成するものの割合が高く、年代別では、高齢者ほどそうした傾向が強い。

男の子、女の子に身につけて欲しい資質として選択された項目の上位５つは、男の子の場合は「活発で行動力がある」、「思いやりがあり優しい心を持つ」、「誠実である」、「自立心が旺盛である」、「職業能力がある」であり、女の子の場合は「思いやりがあり優しい心を持つ」、「気配りができる」、「誰にでも好かれる」、「家事能力がある」、「誠実である」である。男の子らしさ、女の子らしさのイメージはかなり異なっており、男の子には職業能力、女の子には家事能力が期待されるのも特徴的である。性別や年代による選択される項目のばらつきは男の子の方が大きい。男の子の場合、特に、年代によるばらつきが大きく、世代によって男の子らしさのイメージに違いのあることが分かる。それに対して、女の子らしさのイメージにはあまりばらつきが見られず、女の子らしさの方がより固定的であるように思われる。

子どもの将来に期待することに関して、男の子の場合は、「社会的な信頼や信用を得る」と「家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす」に支持が分かれた。女の子の場合は「家族や周りの人たちと円満に明るく暮らす」が圧倒的に支持を集めた。女の子の場合、身につけて欲しい資質として、気配りや誰にでも好かれることが重視されていた。このことを考えあわせると、家族や友人たちからなる小さくて固定的な親密圏において、場の空気を読むなどの他人指向型の適応行動をとりつつ平穏に暮らしていくことが理想的であると考えられているという解釈が成り立つ。これに対して、男の子の場合、行動力や自立心といった他人指向型の適応行動には収まりきらない資質が重視されており、公共圏における信頼・信用の獲得といった要素が、親密圏における平穏さといった要素をしのぐ形で支持されている。男の子の場合、回答者の年代が高くなるに従って、公共圏における信頼・信用を重視する傾向が強くなり、逆に、年代が下

がるにつれて親密圏における平穏さを願う傾向が強まる。

福井県の平成20年における大学・短期大学等への進学率は、総数で56.8％（全国10位）、男性55.6％、女性58.1％（いずれも全国９位）であり[8)]、おしなべて大学進学率が低い地方（非都市部）の中で、教育熱心な地域であるといえる。

子どもに受けさせたい教育の程度に関して、男の子の場合、65.1％が「大学以上」と回答しており、現在の進学率を10％以上、上回る結果となった。女の子の場合、「大学以上」という回答は38.8％であり、女子の短期大学進学率がおよそ10％程度であることを勘案すると、実際の進学率を10％ほど下回る水準になっている。男の子、女の子で受けさせたい教育の水準に有意な差があり、しかも、女の子に受けさせたい教育の程度が実際の水準を下回っている点は注目に値する。女の子に受けさせたい教育の程度に関して、年代別にみると、20～39歳、40～59歳では約46％が「大学以上」と回答しており、実際の進学率に近い割合になっている。これに対して、60歳以上では30％程度に激減し、実際の進学率を大きく下回る。また、子どもに関する性別役割規範との関係についてみると、「女の子は女の子らしく」という考え方に賛成の度合いが強いものほど、「大学以上」という回答の割合が少なくなる傾向が認められる。女の子に受けさせたい教育の程度が、実際の進学水準を下回る理由としては、１）子どもに受けさせたい教育の程度を考えるとき、自分自身の教育水準が準拠枠として参照されるため、高齢者ほど低い水準を選択する傾向があること、２)「女の子らしさ」のイメージと学歴の高さに親和性が乏しく、「女の子らしさ」に肯定的なものほど低学歴でよしとする傾向が強いこと、が指摘できる。

「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく」という考え方に「賛成」もしくは「どちらかといえば賛成」と答えたものの割合は合計で79.9％と８割近くに達し、子どもに身につけて欲しい資質に関しても男の子と女の子ではかなり異なっている。子どもに将来にどのように生きて欲しいかに関しては、女の子の場合は親密圏における人間関係の平穏さに関心が集中するのに対して、男の子の場合は公共圏における信用や信頼の獲得といったことにも期待が向けられる。受けさせたい教育の程度に関しても、男の子の場合、女の子に比べて高学歴志向が強まる。親の子の対する接し方や態度は、子どもがジェンダー意識をはじめとする考え方やものの見方、価値等を形成する上で、大きな影響を与えると考えられており、共働きが一般的な福井県で、男性の家事実施頻度が女性に比べて圧倒的に低いことの一因になっていることが予想される。子どもの育て方が家事分担に与える影響については改めて検討したい。

注

１）塚本利幸「男女間の家事分担の規定要因に関する考察－女性就業率高位の福井県を事例として－」『福井県立大学論集　第37号』2011、41－58頁

2）塚本利幸「福井県の地域特性と少子化抑止」伊藤公雄・冨士谷あつ子編著『日本・ドイツ・イタリア超少子高齢社会からの脱却－家族・社会・文化とジェンダー政策』明石書店、2009、114－128頁。

3）国立社会保障・人口問題研究所の調査は、系統抽出法によって選定された300の国勢調査区に居住する世帯の結婚経験のある女性を対象として、平成20年に配票自計方式で実施されたもので、調査票配布数は13045票、有効回収数は10009票（76.7%）であった。

4）「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく」という考え方への賛否について、「わからない」という回答を除き、「賛成」、「どちらかといえば賛成」、「どちらかといえば反対」、「反対」という回答に順に１から４までの数値を与え、４段階の順序尺度として分析に用いた。

5）アンケート調査では、「男は仕事、女は家庭」という考え方への賛否を尋ねている。「わからない」という回答を除き、「賛成」、「どちらかといえば賛成」、「どちらかといえば反対」、「反対」という回答に順に１から４までの数値を与え、４段階の順序尺度として分析に用いた。

6）アンケート調査では、「食事のしたく」、「食事の後かたづけ」、「洗濯」、「掃除」、「ゴミ出し」、「育児・しつけ」、「看護・介護」の７項目について実施頻度を尋ねている。この内、「非該当」の割合が３％以内に収まった「食事のしたく」、「食事の後かたづけ」、「洗濯」、「掃除」、「ゴミ出し」の５項目について、「いつもする」、「ときどきする」、「ほとんどしない」、「まったくしない」という回答に、それぞれ４から１までの点数を与え、それを合計したものを「日常的家事の実施スコア」として分析に用いた。「日常的家事の実施スコア」は５～20の範囲の値をとり、数字が大きいほど日常的な家事の実施頻度が高いことを表す。最高は20点であり、５つの家事すべてで「いつもする」と回答したことを、最低点は５点であり、すべての家事で「まったくしない」と回答したことを、それぞれ示している。

7）「０時間」、「５時間未満」、「５～10時間未満」、「10～15時間未満」、「15～20時間未満」、「20～25時間未満」、「25～30時間未満」、「30～35時間未満」、「35～40時間未満」、「40～48時間未満」、「48時間以上」という回答に順に１から11までの数値を与え、11段階の順序尺度として分析に用いた。

8）文部科学省生涯学習政策局調査企画課「学校基本調査報告書」